

女子大國文

第百六十五号

令和元年九月発行

女子大國文 第百六十五号

令和元年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十五号

令和元年九月十五日 印刷
令和元年九月三十日 発行

〒606-8501 京都市東山区今熊野北日吉町番地
編輯兼 京都女子大学国文学会
発行者

電話 051-531-9076
FAX 051-531-9120
振替 0000151314
〒606-8501 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 051-441-0184
FAX 051-441-6282

董黯覚書(下)……………黒田 彰(一)

——董黯画卷の復元——

行誉編『堪囊鈔』の『遊仙窟』出典和訓……………西崎 亨(二八)

三條西実隆自筆本『一葉抄』と

京都女子大学図書館蔵『がきな萬葉集』……………江富 範子(六九)

恋とは我心に咲出し花……………峯村 至津子(九三)

——樋口一葉「闇桜」論(その二)——

両足院蔵『月令抄』翻刻・解説(下)……………田上 稔(二八)

彙 報……………(二〇五)

京都女子大学国文学会

彙報

〈卒業論文〉

大伴坂上郎女「理願挽歌」研究

福本真梨子氏

——「朝川渡り」を中心に——

源氏物語『副臥』の特異性

入谷 彩加氏

く親王と源氏の場合く

林原 裕子氏

——なぜ雉なのか——

国木田独歩「鎌倉夫人」における一考察

新谷喜美子氏

——「痛く感じたこと」——

〈修士論文〉

曾禰好忠 表現考

——「毎月集」における人物詠をめぐる——

藤原 静香氏

研究室だより

○本年度の文学部国文学科主任、および国文学会代表幹事は小山順子先生です。山中延之先生、宮崎三世先生とともに、国文学科・国文学会の運営にあたっておられます。

○元本学助教授の芳賀紀雄先生（筑波大学名誉教授）が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一九年度国文学会行事（前期）

○新人生オリエンテーション

四月五日（金）午後一時三十分より 於J224教室

○優秀論文発表会

五月十一日（土）午後一時より 於J420教室

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月十五日（土）午後一時より 於音楽棟2階演奏ホール

着付・囃子・狂言に関する解説を聴講、小鼓・大鼓体験。続いて、狂言『寝音曲』、能『橋弁慶』を鑑賞。

大伴坂上郎女「理願挽歌」研究

—「朝川渡り」を中心に—

福本 真梨子

〈論文要旨〉

卒業論文において考察の対象とするのは、以下に示す『萬葉集』巻三所収の大伴坂上郎女作の長反歌、通称「理願挽歌」である。

七年乙亥、大伴坂上郎女の、
尼理願の死去せしを悲嘆し
て作りし歌一首

たくづのの新羅の国ゆ 人言を良しと聞かして 問い放くる
親族兄弟 なき国に渡り来まして 大君の敷きます国に う
ちひさす都しみみに 里家はさにはあれども いかさまに
思ひけかも つれもなき佐保の山辺に 泣く子なす慕ひき
まして したたへの 家をも造り あらたまの年の緒長く
住まひついでまししものを 生ける者死ぬといふことに 免
れぬものにしあれば 頼めりし人のことごと 草枕旅なる間
に 佐保川を 朝川渡り 春日野をそがひに見つつ あしひ
きの山辺をさして 夕闇と隠りましぬれ 言はむすべせむす

べ知らに たもとほりただひとりして 白たへの衣手干さず
嘆きつつ我が泣く涙 有間山雲居たなびき 雨にふりきや

反歌

留めえぬ命にしあればしたたへの家ゆは出て雲隠りにき（巻

三・四六〇、四六一）

特に、長歌の「佐保川を朝川渡り」の箇所は、先行研究において葬儀の行程を指すものとする考えが通説となっている。しかし、当該箇所は葬儀の光景のみを表現したものなのか疑わしく、以下通説と異なる見解を示す。

まず、「朝川」が「浅川」の表記であったとする先行研究に触れた。『萬葉集』中の「朝」と「浅」の用例を調べると、意味と表記が異なる例はごくわずかであり、坂上郎女他歌の特徴からも推察すると、意味と表記に入れ違いはなかった可能性が高く、「朝川」は「浅川」でなく、「朝川」に間違いない。

「朝川」の表記でなければならない理由について、諸注釈書は柿本人麻呂作「泣血哀慟歌」（巻三・二二〇）中の「鳥じもの朝立ちいまして」を根拠とし、朝に葬儀を行ったからとしていた。しかし、『萬葉集』中の志貴皇子挽歌（巻二・二三〇）には、葬列を照らす松明の明かりの描写があり、時代は異なるが『伊勢物語』や『源氏物語』にも葬儀が夜に営まれたと解釈できる記述が

あつた。

そこで坂上郎女が「朝川」を歌に用いた理由を、同じく「朝川渡る」という表現がみられる但馬皇女歌を踏襲したものと推察した。以下歌群を挙げる。

但馬皇女の、高市皇子の宮に在りし時に、穂積皇子を思ひて御作りたまひし歌一首

①秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛くありと
も(巻二・一一四)

穂積皇子を勅めて、近江の志賀の山寺に遣はしし時に、但馬皇女の御作りたまひし歌一首

②後れ居て恋つつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へわが背
(巻二・一一五)

但馬皇女の、高市皇子の宮に在りし時に彷彿かに穂積皇子に接はり、事既に形はれて御作りたまひし歌一首

③人言を繁み言痛み己が世にいままだ渡らぬ朝川渡る(巻二・一一六)

但馬皇女はかつて坂上郎女の元夫穂積皇子の恋人であつた縁から、坂上郎女が皇女の歌を踏襲した可能性が高く、坂上郎女作の歌に類歌が大変多いことも、踏襲の根拠となつた。

ただ、理願挽歌中の「いかさまに思ひけめかも」や「泣く子な

す慕ひきまして」の表現も柿本人麻呂や山上憶良の歌を踏襲しているが、歌中での意味は独自性に富むものもある。坂上郎女は、歌表現の模倣をしたのではなく、挽歌であることを強調し、比喩表現を巧みに用いることを意識して作歌したといえた。

次に、理願挽歌と但馬皇女歌の共通点を見出すために、但馬皇女歌群の表現の消極性について推察した。

但馬皇女歌②における「標」は「立ち入りを禁ずることを示すしるし」という意味があり、『萬葉集』中の「標」を用いた歌の用例は、ほぼすべて立ち入り禁止を意味し、他者を排除する意識が働いた表現がされていた。よって、②の解釈は、但馬皇女が自らの恋を自制できるように、標を張つて恋人に逢えないようにしてほしいというものと考へた。

但馬皇女歌③は、恋人である穂積皇子に逢うために朝の川を渡つたと解釈する先行研究が多い。しかし、②において恋を自制する表現がみられた点を鑑みると確実とはいえず、「朝川渡る」が皇子に逢うための積極的行動ではないと考へた。

そこで、「人言を繁み言痛み」という言葉に注目し、「人言」＋ミ語法を用いた『萬葉集』中の用例を調査すると、全十例中八例が恋人と逢うことに消極的な表現とわかつた。

但馬皇女歌③は相聞歌であるが内容は消極的であつた。この調

査とともに、挽歌的な他界意識を持つ相聞歌を調べた。

この世には 人言繁し 来む世にも 逢はむわが背子 今な
らずとも (巻四・五四一・高田女王)

この高田女王歌は、噂がうるさいために来世で恋人に逢おうとする他界意識がみられる。また、「人言」の障害により逢瀬が叶わない状況は但馬皇女歌と類似する。よって、恋の喪失により他界への意識が向けられる例は実在すること、挽歌と相聞歌は転用があり得たことがわかった。

以上の調査より、但馬皇女歌③の新たな解釈を「人の噂がしきりなので、未だ渡ったことのない朝の川を渡るように、逢瀬が叶わない『己が世』から別離する」と示した。

また、坂上郎女が但馬皇女歌を踏襲する上で、「朝川渡る」の言葉のみを引用したとは考えにくく、但馬皇女歌の他界のイメージも理願挽歌に含ませたといえた。

但馬皇女歌の「朝川渡る」は、人の噂のない他界へ渡る行為、理願挽歌の「朝川渡り」は、尼理願が長年佐保の地で営んだ日常、生から決別するための行為であると考えた。

挽歌には山中他界の例が多くあるが、理願挽歌のように川、そして浜辺、海など水の景物もいくつか用例がみられる。平安時代に確立された「三途の川」の思想は、『萬葉集』の時代にはな

かったにせよ、水の景物もまた他界を表現するものとして当時考えられていたといえる。

結論として、理願挽歌の「朝川渡り」は但馬皇女歌の「朝川渡る」の言葉の内実までも踏襲した表現であることを示した。

〈論文執筆体験記〉

「自分は卒業論文なんてうまく書けないだろうな」そう四回生になるまで私は思っていました。しかし今思い返してみると、うまく書こうとするよりは、興味であったり、やってみようという前向きな気持ちの方が大事だったと気づきました。

私は就活と卒論の両立が全くできませんでした。とりあえず、四回生になる前の春休みに集めた先行論文をなんとなく読み、題材も曖昧なまま、気づくと九月になっていました。

後輩の皆さんには、前期中に先行論文の研究をある程度進めることを強くお勧めします。

就活が終了したこともあり、何とか周りに追いつこうと必死で先行論文や用例の調査をしました。卒論を後回しにしたツケが回ってきたのは自己責任と思い、辛かったです。

しかし作成の中でも、挽歌と相聞歌の共通性を見出す調査をしていると、人の死による別れを悲しんだり、恋の終焉、別れを悲しむ気持ちは『萬葉集』の時代から何一つ変わっておらず、現代

の人の感情と基本的には同じであると気づいたことは、感慨深かつたです。後輩の皆さんも、卒論を執筆していて卒論対象に思いがけず感動したり、びつくりするような気づきがあるかもしれません。それこそ、ただ義務感で卒論を書くよりはるかに自分にとって財産になると思います。

本文を執筆し始めたのは十月の半ば頃でした。やり方は皆それぞれですが、私は章立てをせずに調査したとと考察を一気に本文にしてから、余分なところや文字数がオーバーしそうなところを先生に相談して省き、章として成り立ちそうなところを見極めて徐々に本文を整えていきました。和歌を対象にしていると用例が大量に出てくるため、専用のファイルを作って整理することもしました。

卒論の進め方や資料の調べ方は人それぞれです。自分がやりやすい形を自発的に考えるということも大切です。しかし、もし行き詰まったりしたときは、迷わずゼミの先生に助言をいただき、友達に悩みを相談してみることも大事と思います。私は本文を執筆し始めると毎週のように池原先生に見ていただき、アドバイスをいただくようにしていました。

卒論が完成した時はかなりの達成感があります。社会人になって、卒論を執筆していた時間は、学生時代の宝物のような思い出

だなと思うことがよくあります。社会に出ると、同時に様々な仕事をこなさないといけないので、何か一つのことには心血注いでがんばるということはできなくなります。だからこそ、後輩の皆さんは、今の時間を大切にしてください。卒論に限らず、授業や部活は今しか経験できません。一生懸命取り組まないと、後で絶対後悔します。

また、日本文学の勉強は社会に出て必ずしも役立つものではないかもしれませんが。しかし、興味を持って選んだ分野を一生懸命学んだ時間は、後から考えると有意義だったなときと思えます。

後輩の皆さんも、自分に自信をもってあきらめず、体には気を付けて卒論を完成させてください。

源氏物語『副臥』の特異性

〜親王と源氏の場合〜

入 谷 彩 加

〈論文要旨〉

紫式部が書いた『源氏物語』桐壺巻の光源氏の婚姻において次の場面がある。

内裏にも、御気色賜らせたまへりければ、「さらば、このを

りの後見なめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。(新全集『源氏物語・桐壺』四六〜四七頁)

一見何も問題がないように思えるが、ここで注目したいのは、「副(添)臥」という語である。この「副臥」について「東宮や皇子の元服の夜、公卿の娘を添臥させる例があった。」と同頁に注釈が書かれている。しかし、この場面での光源氏はもうすでに臣籍降下していたはずである。注釈に書かれているように通常「副臥」とは東宮や皇子の元服の夜に行われるものとされているが、『源氏物語』では光源氏に使われている。臣下に降った源氏に使われているのは何か意味があるのだろうか。作者の何かしらの意図があったのだろうか。そこで本論文では、親王と源氏の違いを中心に「副臥」について論じた。

まず、辞書や注釈書の意味を探ると、曖昧な表現が多く、「副臥」の意味を限定するに至らなかった。また、源氏物語以外の物語や史実には臣下に「副臥」が適用されておらず、ましてや「副臥」は為平親王を除いては東宮にしか行われていないことが分かった。

さらに、源氏の元服描写を当時の元服と比較することにより、源氏の元服が一世源氏を基にしながらも、先例のない特別待遇や東宮のみに行われるはずの『副臥』が使われているという源氏の

特異性が明らかとなった。では、なぜ源氏に東宮の要素を入れたのか。高麗の相人の予言から「副臥」の必要性を考えると、予言を実現させるためには、臣籍降下した元服では予言の意味をなさない。「帝王でもなければ、ただの臣下でもなどという予言に沿うためには、「副臥」は必要不可欠な要素だった。最終的に、源氏は準太上天皇になり、天皇の父親にもなる。準太上天皇も天皇の父親も相人の予言に沿っている。以上から、「副臥」とは、源氏が準太上天皇、天皇の父親になるための伏線であったと考えられる。

いままでの注釈では「副臥」について曖昧な説明しか書かれておらず、ただ源氏が葵上と結婚したと見逃してしまいがちではあったが、実は源氏の今後に影響する一つの重要な伏線だったと考ええると、「副臥」はもつと注目されてもよい箇所であると言える。

〈論文執筆体験記〉

「卒業論文」は大学を卒業する上で、誰もが避けて通れない壁であり、思い出に残るものと言えます。これを読んで、まだしつかりと「卒業論文」のイメージが掴めていない方、何をしたらいいか分からない方の不安が少しでも減ってくれたら幸いです。

私が、論文を執筆する際に、気をつけていたことは三つあります。一つ目は、「ゼミの日とは別に必ず週一で卒論の日を作る」ことです。毎日卒論を少しずつ進めるといのは凄く根気のいることで、私には絶対にできないという自信があったので、週に一回火曜日を卒論の日と決めました。そうすることで、その曜日だけは真剣に卒論を頑張るという意欲が湧き、飽きずに卒論に取り組めたと思います。

二つ目は、「ゼミの日には必ず先生に一つ質問する。」ことです。週一で卒論を進めていると調べていて分からないことや、自分の解釈であっているのかと気になることが沢山出てくると思います。質問をすることで、新しい発見につながったり、先生からヒントを頂いたり、次に何を調べればいいのか分かってきたりします。何から始めたらいいのか分からないと諦めるのではなく、どんな些細なことでもいいから自分の疑問に思ったことを質問してみるようにすると、自分がどの方向に興味を持っているのか見えてくるのではないのでしょうか。

三つ目は、「軸を見失わないようにする。」です。論文を書いてみると、この要素も入れた方がいいのではないか、この部分も重要である、と調べれば調べるほど派生していく内容も増えていきます。しかし、そちらにばかり気を取られていると、話の軸がず

れていき、まとまりづらくなってしまうため、何のためにその要素を入れたのか常に軸を意識していくと書きやすくなるかと思えます。

ここまで、卒論を書く上で私が気をつけていたことを述べてきましたが、実際に私が卒論を文章化したのは十一月に入ってからでした。それまでは、資料集めを主として章立てをしてレジュメを作成し、あとは文章にしてくださいとなっていました。まだ足りない資料があるのではないか、もつと掘り下げた方がいいのではないか、となかなか書こうとしなかったのを覚えています。提出期限が迫ってくると、自分の論文に自信が持てなくなり諦めかけることがあるかと思いますが、そこは一年近く真面目に取り組んできた自分を信じて最後まで乗り越えていってほしいです。

『卒業論文』は、大学で一番勉強した集大成として記憶に残るものです。これから、苦労することもあるかもしれませんが、体調に気を付けて自分の納得のいく論文を書いていってください。国文学科の一卒業生として、応援しています。

雉も鳴かずば撃たれまい

—なぜ雉なのか—

林 原 裕 子

〈論文要旨〉

我が国には、「雉も鳴かずば撃たれまい」ということわざがある。余計なことを言つて自ら災いを招くことのたとえであるが、この言葉の元となる伝説が存在する。摂津国長柄の人柱伝説である。この伝説は様々な形態で広く全国に分布しているが、本稿では安居院が記したとされる『神道集』巻七に収録されている「橋姫明神事」を「長柄の人柱伝説」として扱い、研究対象とする。

この伝説の要約を次に示したい。橋の造立がうまくいかず、人柱を立てることになった。そこに、浅黄の袴の破れたところを白い布で繕った男と小さな子供を背負った妻がやってくる。その時に雉が鳴いたのを聞いて人々がこれを射る。さらにこの男が「浅黄の袴の破れたところを白い布で繕った者を人柱に立てるのが良い」と言ったので、橋奉行はこの男の他に人柱にふさわしい者はいないとして、男を捕まえて縛り付け橋柱にしてしまう。妻は夫との死別を悲しみ、「物ユヘバ父ハナガラノ橋柱ナカズバキジモトラレザラマシ」という歌を一首橋柱に書きつけて子供とともに

（自らもその河へと沈む。このことを哀れんだ人々がこの女を橋姫明神の社を立てて祀ったという。）

ここで注目したいのは雉が射殺される場面があまりに唐突であるということである。妻が最期に詠む「物ユエバ…」の歌の伏線として存在すると考えられるが、なぜ多くの鳥類の中でも特に雉であるかは明らかでない。雉が射殺される場面及び女が歌を詠む場面が無くても人柱伝説は話として成立しえるため、意図的にこの雉についての描写がなされているのではないかとさえ考えられる。

「長柄の人柱伝説」についていくつかの先行研究は見られるものの、その多くは長柄橋の成立時期やその真偽、あるいは人柱が行われていたかどうかということを研究対象としており、雉の登場そのものに注目した研究はほとんど見られない。

本稿では、伝説中に雉が登場することに注目し、「長柄の人柱伝説」が唱導された時代及びそれ以前の時代の諸文献を広く調査することで、なぜ伝説中に雉が登場しなくてはならなかったのかを考察する。

『神道集』が成立したと思われる時代、及び、「長柄の人柱伝説」が人々に広く唱導された時期に成立していたとされる文献を見ていくと、雉についていくつか特徴が浮かび上がってくる。(1)

雉が当時鷹狩りなどの狩りの獲物や贈答品・献上物として代表的であったこと。(2)雉が鳴くことに関する描写がしばしばみられること。(3)雉が妻思い・子思いの鳥であるという描写が和歌を中心にみられること。そして(4)雉が地震や雷鳴のときに鳴き騒ぐという記述が『塵袋』や『続日本紀』にみられること。これらの雉のイメージを総合して文献上における雉の特性を考察すると、雉が「長柄の人柱伝説」に登場した理由が見えてくる。前提として「長柄の人柱伝説」が唱導文芸であったということを考えると、語り手がいかに聞き手に物語の状況を具体的に想像させられるかが伝説唱導の要点になってくると考えられる。さらに、ただ物語の状況を想像させるだけでなく、更なる唱導・伝承に繋げるために、人々の印象にのこる伝説にしていく必要があったことも推測される。そこでこの伝説では、伝説唱導当時の人々に広く認知され、様々な文学作品や習俗を通して一定のイメージを持たれていた「雉」という鳥を登場させることで、伝説の内容を人々の印象により強固に残そうとしたのではないかと考える。

これら四つの雉の特性は、伝説中で人柱に立てられる男の行動を示唆する、または男の行動と重なる部分が多く、雉の登場が伝説の内容に深みを持たせているといえよう。ただ男が徒口を言うて人柱に立てられる伝説にするのではなく、「男が徒口を言う」

という行為と「雉が鳴き声をあげる」姿とを重ね合わせることで、雉の登場する様々な文学作品を聞き手に連想させる。そうすることで、聞き手にとって「長柄の人柱伝説」がより身近で親しみやすいものへと変更されていったのではないかと推定する。

〈論文執筆体験記〉

私の卒業論文執筆は、就職活動が落ち着いた八月から約半年ほどのスピード執筆でした。こんないい加減な人間の体験記が参考になるか否かはひとまず置いて、普通の大学生が卒業論文を書き上げるまでの体験をありのままに後輩の皆さまにお伝えできればと思います。

冒頭でスピード執筆と述べましたが、これは非常に良くないことだと痛感しました。私はいくつものことを同時進行することが苦手な性質で、就職活動中はなかなか論文を執筆するという作業に手を出せませんでした。資料集めや先行研究を探す事ばかりで「自分の考えを文章にする」ということを怠っていました。自分の考えを文章におこすという作業は論文執筆で最もままならない工程ではないかと私は思います。文章化すると意外に思った通りの出来にならないのです。どこか言葉遣いがおかしかったり、構成がうまくいかなかったり、頭の中に明確な考えはあるのに文章にできないという歯痒い思いを執筆中何度も味わいました。とり

あえず文章にしてみるという作業を面倒がらずやってみることが大切だったのではないかと今になって思います。そしてこの文章を考えるとという作業は非常に時間がかかります。ギリギリで文章にするよりも少しずつ考えを文章化したものをためていくことで時間に余裕をもって論文を執筆することができたのではないかと反省しております。

ところで、私は一度論文の題材とする作品を変えようとしたことがありました。先行研究などを読むうちに「長柄の人柱伝説」について自分が問題提起できることが見当たらなくなってしまったためです。ある時ゼミの発表で「題材とする作品を変えようか悩んでいる」とこぼすと、中前先生が「今は変えない方がいいのか」とおっしゃったので、そこでもう一度作品と向き合うという気持ちになりました。何度も読むうちに人柱という大きなテーマに隠れて見落としてきた「雉の登場」という疑問を発見することができました。これはあくまで私の場合ですが、作品を変えなくて良かったと思うのです。一つはこれまでかけてきた時間や集めてきた資料や先行研究が無駄にならずに済んだため。私は保守的な人間なのでこれまでの時間や労力をリセットするという賭けに出られなかったということもあります。もう一つは「雉」という疑問を明らかにする過程で様々な作品に出会うこと

ができたためです。雉は説話だけでなく和歌や歴史書・神話など様々な文献に登場します。私は二回生の頃から民俗学と中世文学のゼミしか選択して来なかったため、四回生になるまでに触れてきた文献はかなり偏っていたと思います。そのため、卒業論文を執筆しなければおそらく読む事は無かっただろう和歌や神話などの幅広い作品を次々と読むことができて非常に面白かったことを覚えていきます。この面白いという気持ちをもって最後まで取り組めたことが良かったのではないかと思います。題材を変えることで好転する方もいると思うので、そこは人それぞれだと思えます。ただ私の場合は、自分が題材に選んだ作品と向き合う時間があった事が、卒業論文の執筆が良い方向へと進んだきっかけではないかと思うのです。また、私は題材とする作品こそ変更していませんが、視点を変えて問題提起する部分の人柱から雉に変更することで執筆を進めることができました。題材に選んだ作品に思い入れがあるが執筆が行き詰っているという方は、その作品を色んな視点から読むことで解決の糸口をつかむことができるかもしれません。

卒業論文を執筆して私が今思うのは、卒業論文は一年で出来上がるものではないということです。執筆中何度も、これまで一回生から履修してきた様々な講義やゼミの内容からヒントを得るこ

とがありました。講義やゼミで得た知識の積み重ねが、卒業論文を完成させる大きな助けになったと感じています。

私の体験記はほんの一例にすぎません。考察が行き詰り、苦しい期間もあるとは思いますが、これから卒業論文を執筆される皆さまが素敵な論文を書き上げられるよう応援しています。

国木田独歩「鎌倉夫人」における一考察

—「痛く感じたこと」—

新 谷 喜美子

〈論文要旨〉

「鎌倉夫人」は、独歩の先妻佐々城信子の後日譚とされている。その前書（後記参照）で、友人の数学家柏田勉から来た手紙（別れた妻を「毒婦だらうか、ハイカラ毒婦だらうか。」と問い、「本能満足主義の勇者だと思ふ」と断じる。）を読んだ小説家が「自分は此手紙を読んで痛く感じたことがある、然し今それを此処では言はない」と述べる。この点について先行研究では、「さきほど「痛く感じた」ことを保留したが、「多くの真実を含んで居る」に自分の感想は示されており、「自分」も柏田勉に賛成だということ表明している」（中島礼子氏）、「独歩の「真実」の心情を『酒中日記』に託したと考えられる」（阿部芳夫氏）と

する。これらの意見の相当性について、人間の本質を念頭に置きながら、本文のほか独歩の実体験や背景事情等も併せ以下の順序で考察した。

まず、作品の構成は書簡体形式であり（前書に書簡を添付）、実在する街、橋、川を舞台に描くことよって手紙の内容が事実であるような印象を与える。次に、愛子の描かれ方を三方向（噂話の中、想念の中、眼前の愛子）から見て、愛子⇨異性に奔放な女というイメージの植え付け、数学家柏田が噂話に引きずられて冷静さを失って行く様子、愛子の振舞い等客観的事実から見たその実像について、各検討した。続いて、「僕」の心情を分析し、愛子を情欲の女と決めつけることよって却って愛子への執着や恨み、その恋人算に対する嫉妬を浮かび上がらせていることがわかった。その後、「鎌倉夫人」発表当時に起こった事実注目し、当時の独歩の心理状態、報知新聞記事「鎌倉丸の艶聞」による影響、本作品と同時期に執筆された「第三者」との関連及び「鎌倉夫人」の執筆動機について各検討し、本文との重なりを考えた。最後に、以上をふまえて「痛く感じたこと」の中身について考察した。小説家の「自分」は、人間の心が理屈では説明のつかないものであること、殊に恋愛に捨てられた者の行き場を失った憤怒はいかに純粹の数学家といえども冷静ではおられず感情に支配

されてしまう現実―人間の脆さ―こそを「痛く感じた」ものと考ええる。

〔前書〕此頃病氣保養のため鎌倉に滞在して居る友人柏田勉から次のやうな手紙が来た、自分は此手紙を読んで痛く感じたことがある、然し今それを此処では言はない、ただ柏田が文学者でも小説家でもなく、純粹の数学家であるだけ、書くことが余り露骨で、艶も飾りもなく時に読者をして躰慄せしめは為ないかを恐れる許。けれども自分は美文家の手にならざる此蕪雜な手紙の中にこそ却つて多くの眞実を含んで居るやうに思ふから敢てこれを公にしたのである（傍線は引用者による。破線部は原文では「　」の濁音である。）。

※「鎌倉夫人」初出週刊『太平洋』第三卷四十三号、四十四号、四十五号 明治三十五年十月二十七日、十一月三日、

同月十日。第四文集『濤声』（明治四十年五月十五日発行

彩雲閣）に収録。

※主たる先行研究

・中島礼子「国木田独歩「鎌倉夫人」―「ハイカラ毒婦」

「君等の所謂る本能満足主義の勇者」をめぐって―『国文学論輯』第二十五号 平成十六年三月五日 六九―九八頁。

・阿部芳夫『鎌倉夫人』に潜む独歩の心理』『国文学言語と文芸』八四号 昭和五十二年六月十五日 八〇―九四頁。

〔論文執筆体験記〕

「卒業論文」という響きは私にとって憧れであった。学生らしい勉強もせずいきなり社会に飛び出し、今一応の職業生活を終えた私にとって、自分の人生でやり残したことの上位三つの中に「卒業論文」が入っていたと思う。

まず、研究作品を何にするかで相当逡巡した。九か月という長い時間を費やす以上、好きな作家のものをやりたいと思つた。三年程前に丁度夏目漱石没後百年ということで書店の平積みは「漱石」一色であった。私も数十年ぶりに漱石を読んで、その痲癩持ちの人のとりも含めて漱石ファンの一人になっていた。

しかし、先行研究を調べてみるとその数量に驚くとともに、漢文学やヨーロッパの文学・哲学等の知識が盛り込まれた作品世界の壮大さに「知識も時間も足りなさすぎる」ことを自覚し、退却せざるを得なかつた。

その後、どの作家にするかで再び悩んだが、今言えることは（当然かもしれないが）、作家の私生活と作品は切り離して考える必要があるということ。この作家のこゝういう性癖が厭だとか、道

徳的な問題はさて置き（これらに拘泥しすぎると研究対象作品が無くなる…）、きっかけは何にせよシンパシーを感じる作品を読み興味を持つことができれば、次段階の研究へと移行できるのではないかと思う。

私は、有島武郎の作品「或る女」が好きであったが、そのヒロイン葉子は「鎌倉夫人」の愛子を原型としており、愛子のモデルは独歩の元妻佐々城信子であった。「鎌倉夫人」の中でこんなにも罵倒された信子が可哀想過ぎて、信子や信子の母豊寿に関する文献を読み進めるうちに、ゼミで宮崎先生から「佐々城信子研究になっていく」とのご指摘を受けてしまった。そこで、改めて本文を丁寧に読むことが研究の基本であることを認識した。また、作品の情景を実際に体感したいと思い、鎌倉まで「海岸橋」と「滑川」を見に行ったことも作品世界の理解の助けとなった（同行してくれた夫には感謝）。

研究に当たっては、他作品も読み進めることになるが、私は年表を大いに活用し、そこに自分の知り得た情報をどんどん書き込んでいった。併せて、同時代の背景事情、交流のあった人々、当時の法制度、特に女性の置かれていた社会的状況などを知ることによって作品世界を膨らませ、具体的にイメージすることができた（今読み返せば、焦点を絞り切れていないなど、反省頻りであ

るが）。

そして、何より卒業論文執筆によって「国木田独歩」という一人の人間について、その一端ではあるが知ることができた。自分以外の一人の人間の人生に寄り添うという稀有な体験をすることができるとも卒業論文ならではのと思う。

みなさん、頑張ってください。身体に気をつけて。

會禰好忠 表現考

—「毎月集」における人物詠をめぐって—

藤原 静香

（論文要旨）

「毎月集」は『會禰好忠集』の巻頭に配置され、集中歌が勅撰集に複数入集するなど、歌人・會禰好忠の中心を為す作品集である。冒頭には自身を年老いた海人に仮託する一首が置かれる。

与謝の海に老いの浪数数へくるあまのしわざと人も見よとぞ
（毎月集・春・二）

好忠は何故、賤民である労働者に焦点を当てようとするのか、彼らに自己を投影したのか。本論文は、労働民を始めとする第三者を詠じた作品を「人物詠」と称し、「毎月集」における人物詠表現の考察によって、和歌表現史での位置付けを試みた。

「毎月集」の編纂態度を定めるために、第一章では各季節部冒頭歌の再検討を行った。四首いずれも経年の嘆きから自己のふがいなさを詠じる構成になっており、日々の和歌は自身の不遇意識によって詠出された作品として位置付けられていると言える。

一章を踏まえた上で、第二章では海人に自己を仮託する作品をめぐり、先行歌における海人・釣人の伝統的な表現方法を確認しながら、好忠歌に至る表現系譜を明らかにする。海人は『万葉集』以来、恋歌や羈旅歌を中心に用いられてきた歌語である。労働民である海人は都人とは隔てられた存在であり、傍観者的立場から景物として詠じる姿勢が主流であった。こうした態度は『古今集』以降も変わらず、むしろ恋歌での使用に集約していく。その中で『万葉集』麻続王歌や『古今集』小野篁歌では、不遇な状況にある身を海人に喩える表現系譜が見られる。漢詩文においても、菅原道真の讃岐時代の詩に、労働民の苦悩に着目し、釣翁に自身を投影する作品が確認出来る。都から離れた場で不遇意識を持つ歌人・詩人たちによって、海人は自己の不遇を投影する対象として用いられるのである。

これまで曾禰好忠による労働への着目は、新たな歌材獲得を目的とした視線であると論じられてきた。本論文では、漁業民の苦悩に着目した詠歌を、海人を用いた不遇表現の系譜を踏襲した作

品として新たに位置づける。労働民を詠じる背景には、都から隔てられた地で苦悩する、好忠の不遇意識が認められるのである。

「毎月集」には海人以外にも多彩な人物が歌中に用いられている。続く第三章では、漁業民以外の人物詠について、「毎月集」が同時代屏風歌の変化を取り入れながら、新たに労苦・寒苦を詠じる様子について検討を行った。後撰集時代の歌人たちは、屏風歌を中心に表現拡大を試み、従来「景物」として用いられてきた画中人物に対して、彼らの心情や夢といった、内面的な様相に踏み込む姿勢を見せていく。そうした流れの中にあつて、好忠は新たに人物の苦悩に着目していく。

先行して制作された「好忠百首」と、今回対象とした「毎月集」を比較すると、同じ労働民を用いながらも、「毎月集」では周辺歌人の表現を摂取しつつ、新たに労苦を詠じようと試みられている。また、冬部には労働民の寒苦詠が複数取められており、彼らの苦悩に対する着目は「毎月集」の特徴的な詠歌と言える。寒苦詠の中には、諷諭詩である白居易の「売炭翁」を典拠とした作品が見られるが、「毎月集」人物詠における労苦・寒苦への着目は、諷諭精神まで受容しておらず、冒頭歌などを検討しても、自身の詠歌に関する視線に一貫している。官人的なむしろ労働民側に立つ詠歌である。

労働民の寒苦は、菅原道真「寒早十首」のように作者が都から離れた場にある時、文学作品に持ち込まれてきた。「毎月集」は労働民の労苦・寒苦を詠むことによって、都から遠く隔てられた場で苦悩する自身の姿を表出しようとする。それは海人への自己投影という不遇表現の系譜を、更に労働民に拡大した詠歌として位置づけられる。景物に過ぎなかった人物詠を、「毎月集」は不遇表出の歌材として用いていく。屏風歌を中心とした人物詠の発展は、「毎月集」で一つの転機を迎えると言えぬ。

第四章では、後世における人物詠の検討と今後の課題を提示した。以後の作品において、歌人と労働民との間には再び距離が置かれる。「毎月集」に繰り返し見られる人物詠は、新奇な歌語の登場として享受され、労働民への自己投影・苦悩にまで踏み込んだ詠歌は、源俊賴などごく限られた歌人へののみ受容される。後世の歌人たちにとって、賤しい労働民の姿は、自己を仮託し不遇を述べるにはあまりにも俗な存在であり、身分のかけ離れた存在であったと考えられる。

これまで「毎月集」における漁業民詠や労働民への視線は、新たな歌材獲得を目的とした詠歌姿勢と評価されてきた。しかし、海人への自己投影は、不遇な状況下にある歌人・詩人たちによって用いられてきた表現であり、「毎月集」ではその系譜を踏襲し

ながら、更に多彩な労働民の苦悩に着目することによって、不遇表出の歌材を拡大していく。本論文では、海人をはじめとする労働民に自己を重ねる詠歌を、不遇詠の系譜上にある作品として位置づけ、本来景物であった労働民の労苦・寒苦に対する着眼が、好忠の不遇意識によるものであることを明らかにした。

〈論文執筆体験記〉

卒業論文から二年。覚悟はしていたものの、時間は瞬く間に過ぎてしまいました。私は卒論に引き続き、修士論文でも曾禰好忠を研究対象としたため、資料や先行研究は既に揃っている状況からスタートしました。しかしながら、用例検討や修論の方向性を定めるのに時間がかり過ぎ、事前に定めていたスケジュールを過ぎて、章の増減を繰り返していました。結果として、好忠以後の和歌・歌論については結論を急いでしまった、先行研究の枠を今一歩出られなかった、という悔しさが未だに残っています。

卒論も修論も、執筆には時間と労力が掛かります。講義の中で出会った、気になる作品や作家があれば、早めに資料を集めることをおすすめします。論文執筆という過程を通して、じっくりと時間を掛けて文学と向き合ってください。

一字一字大切に読む

六回生 紫雲響子

今年度の優秀論文発表会の日はとても暑く、坂を上って会場に着いただけで私は一仕事終えたような気分になっていました。ですが、滝川先生に「感想を書いてみませんか」と声を掛けていただき、これは気を引き締めて発表を聞かねば、と思いました。

今回卒業論文を書かれた方々の発表を聴いて、文章を精読することの重要性を改めて強く感じました。普段自分が、いかに適当に文章を読み流してしまっているか、を実感しました。発表者の皆様は『萬葉集』や『源氏物語』それに昔話の「雉も鳴かずば」、国木田独歩の『鎌倉夫人』などの題材から、それぞれ「朝川渡り」「添伏」「痛く感じたこと」など、細かな単語や文章に注目して研究を進めておられました。「雉も鳴かずば」の発表をされていた林原さんは「鳴くのは何故雉なのだろう」ということに注目されていて、言われてみれば雁でも構わない訳で、なるほど鋭い着眼点だと感じました。今回発表して下さった方々は、大学での授業などを通して、文章を一字一字大切に読む姿勢を身につけておられたからこそ、普通に読むだけでは気付けない部分に疑問を持ち、研究のきっかけにされたのだらうと思います。それから、

『鎌倉夫人』に関して発表をされていた新谷さんが「変態は嫌だなあ、と思って谷崎はやめた」というようなことを仰っていて、思わず吹き出してしまいました。確かに一年間付き合う相手になる訳ですから、好きだなあ面白いなあと自分が思える作者、作品を選ぶことも大切だと思います。

修士論文の発表では、長い和歌史を観ながら曾禰好忠の表現について論じておられて、卒業論文から更に進んだ研究とはどういうものか、ということが臆気ながらわかった気がします。また、深く掘り下げるためには、幅広い知識が必要なのだと感じました。

ただ、それぞれの方が発表された後、主に先生方からの鋭い質問やご指摘もあり、研究という行為そのものの難しさも感じました。「自分で書いた文章を疑うのは難しいことだ」と発表者の方も仰っていましたが、自分の視点だけではどうしても考えの偏りや、説明不足の点などが出てきてしまうと思います。時間的な余裕がなかなか持てないとは思いますが、卒業論文を書き出したら、こまめに先生方や友人、家族などに執筆中の論文を見てもらい、わかりにくくなっている部分を指摘してもらおうと思えました。

茶話会では先生方、発表者の方と沢山お話しすることが出来ま

した。発表者の方の卒論執筆体験談も非常に参考になったのは勿論のこと、先生方とも普段授業以外でお話する機会があまりないので、色々なお話を伺えて楽しかったです。そして、キーキが本当に美味しかったので、来年度は発表者としてキーキをいただきたいなあと思いました。今回の優秀論文発表会のお話を活かして、卒論執筆、頑張りたいと思います。

優秀論文発表会に参加して

三回生 麻生 いちご

優秀論文発表会は先輩方から専門的な論文の内容だけでなく、私たち後輩へのアドバイスも聞くことができる素晴らしい行事です。今回で私は二回目の参加だったのですが、毎回聞きに行った後、本当に参加して良かったと思えます。

どの先輩方も「早く取り掛かること」「できるだけ多くの資料を集めること」「図書館やインターネットを活用すること」などが重要だと教えてくださいました。「早く取り掛かること」に関しては、研究の方向性が予定とずれたり、就職活動との両立が難しくかったり、あらゆる問題が起こる可能性があるため、早め早めにやれることはやっておくことが大切だとおっしゃっていました。また、「できるだけ多くの資料を集めること」に関しては、

卒業論文を進め、研究を深めるために必要なことだと分かりました。見つけた資料は、使うか使わないか分からなくてもコピーをして取っておくと良いと教えていただき、私も実践しようと思いました。資料収集に対しても早めに行うことが卒業論文を完成させるために重要になるのだと先輩方から教えていただきました。そして、「図書館やインターネットを活用すること」に関しては、新しくなった図書館を上手く活用するために、あらかじめよく使う資料の場所を探っておいたり、よく使う資料の近くで作業したりすると良いと教えていただきました。また、インターネットを上手く活用することで時間短縮につながり、時間を上手く使えることも分かりました。

この他にもたくさん教えていただいたので、今から少しずつ、教えていただいたことを意識して色々なことに取り組んでいきたいと思えます。また、先輩が週一回は必ず卒業論文を進める日を作っていたとおっしゃっていて、とても良い考えだと思ったので、真似して私も計画的に卒業論文を進められるよう、今から計画的に学習を進める癖を身に付けたいです。

優秀論文発表会の後に、茶話会という、もつと先輩方と気軽にお話ができる催しもあり、今回初めて参加しましたが、非常に楽しかったです。卒業論文のことだけでなく普段の授業や資格のこ

など様々なお話が聞けます。大変有意義で貴重な体験でした。

先輩方の卒業論文を聞いて、こんな風に卒業論文を書けるだろうかと不安になります。しかし、それ以上に先輩方のお話から、大学生活四年間の集大成である卒業論文のやりがいと、一つの大きなことを成し遂げる達成感を味わえる卒業論文を頑張って私も完成させたいと思えます。優秀論文発表会に参加してなければ、マイナスイメージばかりで、頑張ろうと思えるようにはなっていないかもしれません。

優秀論文発表会は、これまでの先輩方に続いていけるよう努力したいと思える、本当に貴重な場であると思います。上回生だけでなく、一回生からでもとても良いお話が聞けると思うので是非参加してみてください。

発表して下さった先輩方、準備して下さった先生方、受付をして下さった係の方々、本当にありがとうございます。

新入生歓迎行事 能楽鑑賞会観覧記（六月十五日）

私を感じた能楽の魅力

一回生 高本希望

今回の行事で初めて能楽を鑑賞しました。今までは「能楽」と聞くと、内容が難しくついていけないイメージがありました。しかし、実際に能楽を鑑賞して印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、役者の動きです。「能は重力に従って下降し、地球と一体化するのが能楽です」というお話がありました。「地球と一体化する」という通り演者の方が足を高く上げるなどバレエのように重力に逆らうような動作はなく、全体的に洗練された動作でした。しかし、役者の動きはシンプルでありつつもエネルギーで、静かな迫力を感じました。

二つ目は、舞台上での発声や音の演出です。まず、役者さんの発声の仕方が独特でした。普段の私たちの話す声とは全く違って、体の底から発声しているような印象を受けました。その独特の発声法が能楽ならではの面白さの一つだと思います。次に私を感じたのは、地謡の音の重なりです。地謡は三人でそれぞれ違うメロディーを謡います。それが分厚い音となって舞台上で舞う

シテの動きをより引き立てていました。地謡はシテの心の中を謡っていると言明がりましたが、その内容がすべて理解できなくても伝わってくる魅力が地謡の音にはありました。

一回生 松尾美玖

三つ目は、「能楽は想像しながら楽しむ」ということです。想像しながら楽しむとは、見えない部分を自分の中で作り上げて補うことだと思えます。能楽には舞台上にベニヤ板でできた木や建物がなかったり、酒を飲む動作も扇子で表現されていたりと観客に想像させる工夫がありました。その工夫があることで、同じ公演を観ている観客一人一人が違う光景を見ているというのは面白いと思えました。

この三つのことに気づくことができたことで、動きも音も演出もすべてが丁寧に考えた末に生み出されたのだと感ずることができました。そして、今まで私の中にあつた能楽の難しいイメージをい意味で壊してくれました。これを受けて、食わず嫌いをしていると発見の機会を逃すということを学びました。これから何事にも一度は触れていこうと思います。

能楽鑑賞会を終えて

結論から述べると、本当に面白かった。大げさではなく、今まで遠く感じていた古典芸能を一気に身近に感じることができた。今回の能楽鑑賞会に参加するまで、私の能や狂言についての知識はほぼ無に近かった。幼い頃観ていたNHKの「にほんごであそぼ」で得た知識程度しかない私がかこまで楽しめるとは思っていなかった。

まず、着付けから驚いた。どの角度から見ても美しく華やかだった。「おあたり」や「おしまり」という言葉も、普段なら絶対に聞くことができない言葉だと思ふと興奮した。鑑賞会後にネットで能装束について調べたが、演じる役によつて様々な装束があり、その種類の多さと柄の美しさに感嘆した。

狂言《寝音曲》では、私の中の狂言はお堅い古典芸能だというイメージが瞬く間に払拭された。どこがお堅い古典芸能だったのだろう。これは確かに親しみやすい娯楽である。遠い昔の室町時代の庶民が楽しんでいた作品を、現代の私たちも楽しめるというのはどれほどすごいことなのか。《寝音曲》を鑑賞しながら、この文化を絶やすことなく現代まで紡いできた数多の人々に感謝し

た。現代にはテレビや映画、ゲームなど様々な娯楽があるが、このような古典芸能も全く古臭くない生きた娯楽であると強く感じた。

能（橋弁慶）は庄巻の一言に尽きる。話の内容はある程度知っていたものの、いざ目の前で演じているのを見ると初めてこの話と出会ったかのような気分になった。ただ文字を追って話を知るのは全く違う。演者の無駄のない身のこなし、地謡の体の芯にまで響く歌声などを感じてこそ能だと思った。弁慶と牛若丸の斬り合いのシーンが一番印象に残っている。あんなに大きな薙刀がまるで弁慶の一部であるかのように感じられた。とにかく動きが美しい。足踏みひとつにもその場を一瞬で支配してしまうような強さがあった。最後までぶれない体の運びに感動した。舞台も京都の五条の橋。自分がある有名な牛若丸と弁慶の話の舞台の近くにいるということに今更ながら胸が高鳴った。

今回の能楽鑑賞会を終えて得るものは多かった。大鼓の体験も良い経験となった。触ったことのない楽器で、音を鳴らすのは難しかったがこの楽器を扱う人のすごさを知ることができた。私は今まで能と狂言を実際に鑑賞したことはなく、この鑑賞会がなかったら自分から進んで観に行くこともなかったかもしれない。しかし、この鑑賞会で能や狂言の面白さを知った。私を含め、こ

のような古典芸能はハードルが高いと遠ざけている人にこの面白さを知ってほしい。装束の美しさや楽器の存在感、演者の動きなど見どころはたくさんある。自分が生まれ育った国にはこんなにも誇れる文化がある。後世に残していきたい文化がある。せっかく京都という素晴らしい場所に来たのだから、この大学四年間でいろんな古典芸能に触れてみようと思う。私と古典芸能をつないでくれた良いきっかけとなった。

二〇一八年度(平成三〇年度)論文題目

博士論文

源氏物語の人物造型 — 金剛醜女説話の受容について — 今井 友子

修士論文

曾禰好忠 表現考
— 「毎月集」における人物詠をめぐって — 藤原 静香

卒業論文

万葉集の春の景物研究 — 春雨を中心に — 木村 仁美
人麻呂歌集七夕歌研究 — 渡瀬昌忠説の検証を中心に — 池田真奈絵
上代における鳥 — 『古事記』・『萬葉集』を中心に — 井ノ口菜央

中臣宅守歌の再検討 — その獨創性と類歌性 — 小出莉里花
上代における「月」と「月夜」の表現 瀬川紗也香
— 『万葉集』を中心に —

史生尾張少昨を教へ諭す歌 — 物語性の検討を中心に — 田中 佑佳
大伴家持七夕歌考 日比 綾音
— 三九〇番歌「雲立ち渡る」の譬喩 —

大伴坂上郎女「理願挽歌」研究 福本真梨子
— 「朝川渡り」を中心に —

笠女郎表現研究 — 「つるぎたち」を中心に — 本田美彩紀
磐姫皇后八七番歌考 前田喜美子
— 「わが黒髪に霜の置くまでに」の解釈をめぐって —

大伴坂上郎女研究 松井 唯
— 六八三番歌と六八八番歌を中心に —
上代の接尾語ラの研究 森下 成海
— 『萬葉集』の「娘子ら」「子ら」を中心に —

上代

中古

『とりかへばや物語』における楽器の性質 澤部美菜子
『和泉式部日記』における作者の狙い 成本 香菜
— 和泉式部像の悪印象の払拭 —

『宝船絵』の変遷と信仰形態

—何故七福神は船に乗ってやって来るのか—

井波 穂香

現代の妖怪観について —妖怪マンガの検討を通して—

宇野 遥香

源氏物語『副臥』の特異性 —親王と源氏の場合—

入谷 彩加

—化け方の比較と現在の印象に至るまで—

宇野 日向

藤原公任「三船の誉れ」虚構の意図

栗原 陽子

小野篁説話の伝播と変遷

大野 陽菜

『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の構造について

高木あゆみ

地蔵説話の変遷 —満仲郎等蘇生説話について—

岡本 愛美

—「虫めづる姫君」は隣の爺型か—

多田 琴梨

法観寺・八坂の塔再建の経緯 —浄蔵説話を中心に—

垣花 佳奈

『伊勢物語』の恋愛のかたち —「待つ」を視点に—

千葉 郁恵

『鉢かづき』における鉢の役割と母娘の絆

梶本 梨恵

『とほがたり』における二条院の旅の意義

多田 琴梨

「六道の辻」の異界性について

高下ちはる

—父雅忠と後深草院を中心に—

福田 真梨

地域おこしにおける河童伝説

高尾 純奈

和歌に見る「からこもも」

福田 真梨

—福岡県久留米市田主丸町の事例について—

高岡 芽惟

—『源氏物語』末摘花の和歌を中心に—

藤川 響歌

『今昔物語集』と「鬼一口」

高岡 芽惟

清少納言と藤原行成の関係

藤川 響歌

—巻二十第三十七と巻二十七第七を中心に—

丹地 美結

—一局の簾うちかづきなどし給めりき—

峰 玲奈

『今昔物語集』巻三十のもつメッセ—ジ性

丹地 美結

物語における天狗の比較

峰 玲奈

—愛欲と情の恋愛のかたち—

堤 菜々子

—『とりかへばや物語』を中心に—

峰 玲奈

安倍晴明と狐の結びつき

堤 菜々子

—信太妻伝承の成立と背景から—

荒井 多恵

雉も鳴かずば撃たれまい —なぜ雉なのか—

林原 裕子

中 世

赤染衛門 —良妻賢母像の変遷—

荒井 多恵

『今昔物語集』に見える女性像

平田奈々子

『天性寺聖地藏尊縁起』の特徴

宇治川慶海

予言獣としての人魚の姿について

山下 純香

—従前の蛸地藏縁起と比較して—

宇治川慶海

「三十三間堂」泉の変遷 —禮泉が夜泣泉になるまで—

山田 美伽

近世初期大名の文芸活動 — 岡山藩主池田光政を例に —

横山 郁乃

辞世とは何か

渡辺 和

『天正狂言本』にみる中世の笑い

秋野 名苗

近松世話浄瑠璃『淀鯉出世滝徳』における脚色の意図

浅田 曆

— 近世の笑いと比較して —

— 『五十年忌歌念仏』と比較して —

狂言〈楽阿弥〉成立考 — 楽阿弥の意義を中心に —

上田 薫

『義経千本桜』四段目のパロディ諸相

荒木 真帆

小学校国語科での狂言の指導の構想と実践

岡本 莉奈

— 落語『猫の忠信』・『初音の鼓』を中心に —

狂言『首引』考 — 鎮西八郎為朝に着目して —

加藤 千夏

京伝の描く「まこと」考

奥田亜梨紗

狂言『釣狐』考

加藤 怜奈

— 『傾城買四十八手』・『真の手』を中心に —

— 『天正狂言本』における語りと笑いの関係 —

練谷 遥

『二郎兵衛おきさ 今宮の心中』論

笹橋麻衣子

— 時代背景とその比較 —

練谷 遥

— 作品での女人往生を中心に —

狂言〈川上〉考 — その変遷と展開について —

谷口絵美里

『うどんそば化物大江山』における工夫

酒井 綾花

説経節「しんとく丸」考 — 申し子の発病と観音 —

松影 朱香

— 酒吞童子ものとの比較を通して —

笹田 華生

近 世

和歌注釈書『にはたづみ』考

赤石ひろこ

山東京伝『心学早染草』論

重松明日香

白隠の画賛と和歌

小杭 聖

— 心学の取り込み方とその効果 —

関口 里菜

橘曙寛「独楽吟」攷

中垣乃斗加

『曾根崎心中』におけるお初の人物描写の意義

鳥羽 美咲

— 「たのしみは」というスタイル —

中垣乃斗加

— 共通点を中心に —

在原業平歌における「神代」 — 虚構世界と神の視点 —

安田 茉央

『雨月物語』「吉備津の釜」論

二宮 彩葉

『豊玉発句集』考 — 土方歳三のまなざし —

山本美夏海

— 磯良の人物像と「鬼化」との関係 —

近松門左衛門『けいせい反魂香』

みやの人物像から見る「情」論

—『冥途の飛脚』梅川との比較—

近松世話物の「起請文」と「文」という

小道具の役割について

—『心中刃は氷の朔日』と『心中天の網島』を中心に—

『奥州安達原』における近松平二の工夫

—四段目「一つ家」における岩手の悲劇性を中心に—

『卯月紅葉』と『卯月潤色』における「本有」と

「中有」の仕掛け

—お亀と与兵衛の〈死者との対話〉を中心に—

『金々先生菜花夢』における画期性の再検討

—先行する草双紙との比較を通して—

『曾根崎心中』における近松の意図

—お初と心中物における女主人公たちとの比較を中心に—

近代

『満潮の時刻』論—「生活」と「人生」を中心に—

泉鏡花「清心庵」における〈特殊な水〉について

江戸川乱歩「芋虫」論

則武 瑞乃

—乱歩の嗜虐的趣味の観点から—

宮沢賢治「貝の火」論—ホモイの涙を中心に—

箕浦の手記として「孤島の鬼」を見る

—〈恐怖〉の描写について—

花房 美涼

北杜夫「谿間にて」研究

—「私」の心情の変化について—

福本 望帆

「幫間」衣装論—衣装からみる「幫間」—

「風邪ごっこ」人物造形論

—近代小説としての表現について—

夢野久作「死後の恋」論

—「キチガイ地獄」との比較をもとに—

谷崎潤一郎「刺青」論—初期作品の絵を中心に—

川端康成「弓浦市」研究

—〈事実〉とフィクションの共存—

吉行淳之介「驟雨」論

—永井荷風「濯東綺譚」との比較を通して—

江戸川乱歩「パノラマ島奇談」論

—探偵小説と乱歩の夢—

太宰治「雀」論

—少女タキの発言と郷愁の検討—

國本 幸江

塚本 萌乃

土屋 美如

寺野 麻也

中村美由希

永田 桜子

成田 智海

福田有希奈

宮崎 梨花

森 佐和子

森 菜都美

田田 陽菜

小笠原みなみ

國枝 和美

泉鏡花「葉草取」論 — 執筆背景から見る鏡花の願い — 山川 桃佳

太宰治『虚構の春』論 — 百面相の書簡群 — 北田 純美

太宰治「燈籠」論 上田紗耶加

— 女性独白体の成立とその意味について —

大峰山における女人禁制の維持と伝統 宇野 文菜

太宰治「畜犬談」論 遠藤 美香

— 作品における笑いと主題について —

坂口安吾「傲慢な眼」論 米田 萌恵

— 存在する「方的」を探る —

太宰治「愛と美について」の考察 副島日菜子

— 中期太宰文学に於ける愛 —

太宰治『お伽草紙』における「カチカチ山」論 大黒 真夕

太宰治「水仙」における自己愛の役割 中村 円

— 「僕」が「水仙」の絵を引き裂いた理由 —

太宰治「きりぎりす」に見られる「私」の独占欲 菱川 聡美

— 「きりぎりす」という言葉が用いられた意味 —

太宰治「薄明」について 藤井萌々子

太宰治「彼は昔の彼ならず」論 藤田菜々子

— 「無性格」という共通点と「無性格」に対する気づきの差異 —

太宰治「猿面冠者」における「第二の通信」と「少女」の役割

坂口安吾「青鬼の禪を洗う女」における「退屈」 藤友茉悠香

— 「なつかしさ」との関わり — 三浦 悠希

石川淳「處女懐胎」論 横井真理乃

国木田独歩「鎌倉夫人」における一考察 新谷喜美子

— 「痛く感じたこと」 —

漢 文

かすむ月とくもる月に関する考察 青山奈那美

— 『万葉集』から『新古今和歌集』まで — 小堂 藤乃

中国漢詩における「雲林」について 花田 恵理

— 王維「桃源行」を中心に —

『万葉集』一四七三番歌の解釈について 平塚 恵理

— 弔意の有無をめぐって —

『莊子』における「無用之用」が後世に与えた影響 山本 瑞稀

— 『白氏文集』を用いて —

上代日本文学における「庭」について 木村 美柚

国 語 学

京言葉について — 年代別小説の比較から —

一九八〇年代から二〇〇〇年代への変化

―流行歌における形容詞の比較から―

子ども向けアニメに見る語彙

―テレビアニメ主題歌の歌詞―

慣用句を中心とする日本語誤用

―アンケートによる誤用の実態・意識調査―

若者の感情表現について ―言葉の流行と衰退から―

キラキラネームについて

―京都女子大学生へのアンケート調査と共に―

方言使用の現在

―「表記される話し言葉」において―

香川県高松市の方言について

―高校生へのアンケートをもとに―

京都女子大学生の敬語意識と使用実態

―アンケート結果をもとに―

課題図書から見るオノマトペ

歌詞における色彩表現

―ポルノグラフィティの楽曲における―

キヤッチコピーの表現特性 ―化粧品を対象として―

外来語について ―学内アンケートの結果から―

池田 えみ

児童文学におけるオノマトペ ―対象年齢別に―

植物名称の表記について

日本映画の台詞 ―一九六〇年代以降の変遷―

命名論 ―ポケモンを例に―

「死語」について ―学内アンケート調査より―

流行歌における日本語の変遷

―一九四〇年代から二〇一〇年代まで―

女子大学生の「かわいい」表現について

―女子大学生へのアンケートをもとに―

当て字表現の効果と意識

―歌詞調査とアンケート調査より―

清酒の銘柄 ―甘辛との関係性を検証する―

こどものうたから見るオノマトペ

終助詞の変遷 ―かも・かなについて―

近代における機関・施設名に用いた「院」の成立と展開

情報伝達手段からみる現代若者ことば

―『恋愛』とSNSにおけるやり取りの比較をもとに―

音象徴に基づく命名の可能性

―薬名の変遷をたどって―

町田 朋優

森川 梨奈

矢田有佳里

飯本万里乃

山下実乃里

山本 千紗

山本 陽葵

山本 陽葵

横山 奏

横山 奏

吉田 春那

吉田 裕美

市川 春菜

市川 春菜

寺島 伶菜

市原 真衣

市原 真衣

加納 奈穂

加納 奈穂

絵本におけるオノマトペ

川岸 佑璃

— 臨時のオノマトペを中心に —

Creepy Nuts における韻の多様性 — サビを中心に —

河村 奈歩

「そもそも」の品詞別用法について

猿向 鞠

スタジオジブリ作品にみる役割語としての終助詞「の」

高岡 彩夜

乱歩作品から検討する文章表現の視覚性

高橋英里子

— 色彩・絵画を視座として —

「十分」と「充分」 — 俗説の検証とその歴史 —

畑 寧子

若者語としての「神」

船越 美里

— 少女コミック誌『りぼん』の分析を中心に —

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

集事務局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

池原陽斉・小山順子・坂本信道・滝川幸司・山崎ゆみ・山
中延之

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を
報告、審議の結果、四点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(滝川・峯村)